

西真寺 寺報

平成二十八年 秋号

挨拶

初秋の候、平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。お盆の期間中、棚経のお参りをさせて頂いた際、皆様に温かく出迎えて頂き大変有難うございました。

今回の棚経は、初めてということもあり、縦代の方々に皆様の自宅まで、車で送つていただき、何とか訪問予定時間を大幅に過ぎることなく、勤める事が出来ました。来年も今回同様に、順番や地域を踏襲させて頂きますので、よろしくお願ひします。

お盆が終わりますと、直ぐにお彼岸の期間を迎えることに成ります。ほとんどの方が、お盆もお彼岸も亡くなつた方々の供養の為のものであると考えておられると思ひます。また、お寺の行事にお参りさせてもらうのは、もう少し年を取つてからと思われる方も大半です。しかし、生きている私たちの為にお盆も彼岸もあるのです。亡き人達が、生きている間に、健健康なうちに（体を壊してからでは、中々お参りできません）お寺にお参りし仏教を聴聞することで、自分自身が抱える根本にある不安を明らかにしなさいと問いかけています。亡き人と仏教を結ぶ役割がお盆であり、お彼岸でもあり、お寺の行事でもあるのです。私はそのお手伝いの身です。

終活などのセミナーが最近多く見受けられますが、いつ死んでも良いと言える生き方を歩むならば、相続手続きも大事ですが、人々が作つてくれたお寺とのご縁、仏縁を第一に考えて頂ければ、おのずと道は開かれます。報恩講でお会いしましょう。

■彼岸について

彼岸とは春と秋の年二回、春分の日と秋分の日に中日として行われる仏教行事です。この行事は、インドや中国などには無い日本独自の行事であります。その始まりは、奈良時代に政争に巻き込まれ、無念の死をとげた早良親王（仏教を深く信仰していた）を弔うために全国の僧侶が読経した事が始まりとされておりまです。（「日本後紀」に記述）。それがやがて世間に広まり、春分、秋分の日に死者を供養するようになつたと考えられています。

仏教では西方浄土と言つて、西方を大切にします。「西」は太陽の沈む方角であり、一日の営みが終わり、すべてが安らかに終わる象徴的な方角であり、すべての存在が最期に帰つていく世界を表しています。春分と秋分の日は太陽が真東から昇り、真西に沈む、まさに人間が最期に帰つていく西方浄土を思うことができる最適な日だつたのでしょうか。（村上の夕日は格別です）

「彼岸」という言葉に対しては、「死後の世界」のようなイメージを持たれるかたも多いのではないかでしようか。しかし、「彼岸」という言葉は、本来そういうどこか別世界を指すものではないのです。迷いと苦しみの中で生死する私たちの世界を「此岸」（シカ）と表し、そこから解放された仏教の理想の境地を「彼岸」と表現したのです。

私たちが生きる「此岸」とは、自らの存在ばかりを主張して、自分の思い通りにならないものを排除しようとする世界観です。（どこかの国の大統領候補が持つている世界観を指します）そんな私たちの在り方を映し出すために、阿弥陀の世界（「彼岸」の世界）は言葉となり、その世界観がお経として伝承されてきました。いつでも、どこでも、選ばず、嫌わず、見捨てず、という阿弥陀仏の浄土の世界としての「彼岸」は「此岸」にもがき苦しむ私たちに知らしめる世界となつてはたらき続けています。そし

て、日頃の自らの在り方（此岸の生き方）に対する問いや、私たちが煩惱を抱えている身でありながら、自らを絶対化している事に気付いてほしいという、深い願い（本願）がかけられています。私たち真宗門徒はこれまで、人の死の悲しみを通して儀式を勤め、聞法し、死において見えてくる生の本質を教えられてきました。ですから、真宗において「彼岸」とは「此岸」に生きる私たちに向けられた問いかけと言えるのではないでしょうか。お寺にお墓をお持ちの方々は、お彼岸に年中行事としてお墓参りをなされる方が多いと思います。それは亡き人へのお参りだけでなく、仏様のご縁・促しによって、自らの在り方を見つめなおし、仏法に出会えた事に感謝してお参り頂く仏縁なのです。

合掌

特に最近増えていく家族葬では、寺院費用を含めた予算を先に決めて出来る限りの事をするように勤めてください。費用を抑えられる意味で家族葬を考えておられる方が多く見られます。よほど事で無い限り家族葬はあまりお薦め出来ません。通常ですと会館に支払う分を香典で補い、お布施だけ遺族が負担する事になります。しかし家族葬の場合、香典を頂かない為、ほとんど全費用が負担になります。

また、亡くなつたかたが中心であつた関わりやご縁を家族葬によつて切り捨てる事は、後に続く縁者関係に確執を生みやすくなるのも事実です。亡き人は、私が居なくなつても私の代わりにお札を伝え、新しい関係性を次世代で築いて欲しいと願われています。亡くなつた方が一番悲しむ結果にならないようによくよく考える必要があるのではないか。

見栄えだけの葬儀で中身が伴わない葬儀が多くなりました。華美な装飾よりも僧侶の読経（声明）が莊厳の根幹であり、葬儀の中心になることを知れば、おのずと自宅で心のこもつた葬儀も可能となります。儀式は、お寺で貸し出す本尊と僧侶の声明で十分執り行えるからです。

■ 「葬式を考える」

ご葬儀・告別式とは

ご葬儀は人生で最後の最も厳粛な儀式です。葬儀は「亡き人に永遠の別れを告げる」という単純な葬送儀礼ではなく、遺族や縁故の方々が集まり、故人を偲び読経念佛して、人生の無常を受け入れ、尊い仏縁にあうという大切なご縁でもあります。

華美になることなく、また見栄や外聞にとらわれることなく、阿弥陀如来のおはたらきによつてお浄土へ還られた故人を偲びながら、生と死の問題に向き合うことが求められます。また人生の節目として、生きている我々の人間成就の過程として執り行うもので、他宗派でいう引導を渡すことではありません。

■ 西真寺 報恩講
十月十日（月曜祝日）十時より西真寺本堂にて お齋正午より

■ 村上真宗門徒同朋会の法話

九月から十一月の七時から八時半（十二月から二月まで休み）
会場 小町 安善寺様本堂 年会費千円
1951年から行われている真宗の学習の会で、各寺院の枠を超えた交流の場であります。詳しくは当山迄問い合わせください

生前のご準備

この世に生まれてきた以上誰でも平等に死は訪れます。いざと言ふ時に慌てて取り返しのつかない後悔をしないためにも、テレビ等で流れる情報に依る流行りの葬儀様式に流されることなく、主体的に取り組む必要があります。

■ 次号は、「禅宗と真宗の違い」を予定しています